

# Essay

Sapiarc.com

2012年7月30日(2012-08)

## 明治が終わって100年

2日前の新聞に明治神宮が掲載した広告で、明治時代が終わってから今月末でちょうど100年になることを知った。明治天皇が崩御されたのは明治45年7月30日だった。明治45年は西暦1912年に当るので、確かに今年が明治が終わってから100年に当る。

明治が終わって100年と言われても、私自身はとくに何かを感じることはない。おそらく現代人の多くは同じだろう。明治という時代は、本で読むことによって知るものであり、昨年までの3年間の年末に、NHK総合テレビが数回ずつ放映した「坂の上の雲」などで見るものではない。

明治が終わってから100年ということを感じがずに、偶然、私は大濱徹也著「乃木希典」（講談社学術文庫）を数日前から少しずつ読んでいた。新しい本ではなく、初版は1967年に出版されたものだが、2010年12月に文庫本になったものだ。この本には、乃木の日記が掲載されていることを知ったので、それを読んでみたかったのだが、乃木という人物の実像について、この日記から、不十分ながら、ある程度のことを知り得たという感じがしている。

このエッセイを書いている、そもそも今の若い人たちは、乃木希典（のぎ・まれすけ）という名前を知っているのだろうかという疑問が私の中に浮かんできた。「坂の上の雲」は司馬遼太郎の代表作のひとつで、上記のようにNHKがテレビドラマ化もしたが、その中で登場する

乃木という人物について、人々がどれくらい記憶しているか、私にはわからない。

しかし、明治という時代について何かまとまったことを語ろうとすると、乃木に触れないで済ますことはおそらくできないだろう。何故かという、乃木が、日露戦争で第一の激戦場であった旅順要塞攻略を指揮した将軍（第3軍司令官）であったこと、この戦争で令息2人を失ったこと、それに加えて、明治天皇のご大葬の日に「殉死」という形で自刃したこと、などによって、その後「軍神」として祀られ崇められる存在になったからだ。

乃木という人物の評価は、彼の生存中から分かれていたようだが、「殉死」という、当時としても時代錯誤的な行為によって、さらに議論の対象となった。この点については、上記の「乃木希典」に詳しく述べられている。しかし、一般民衆は、この行為を非常に尊いものと感じたのであり、その動きを当時の政府は利用して、乃木を「軍神」に仕立て上げ、日本の軍国化を進めようとしたのだ。実際には、明治の次の大正時代は大正デモクラシーの時代だったが、昭和に入って軍国化は進み、それがアジア・太平洋戦争につながる。

ところが、上記の本を読んでみると、乃木の実像は「軍神」などというものとはかけ離れたもので、実は乃木自身が明治という時代の犠牲者だったとすらいえるのではないかと、私には思えてきた。これは、この本の冒頭に掲げられている、櫻井忠温著「将軍乃木」からの引用文

によく表されている。櫻井忠温(さくらい・ただよし)は、陸軍軍人で少将にまでなった人だが、旅順要塞攻略戦で自身が瀕死の重傷を負った経験に基づいて、戦後「肉弾」などの戦記を書いたことで有名になった人だ。「將軍乃木」からの引用を次に写しておく(旧かな使いのまま)。

『人間としての乃木さんは淋しい暗いものであった。』

地位を得、名誉を得るといふなら、乃木さんは、伯爵であり、功一級であり大将であった。しかし、乃木さんには、自分を狭いものにするほど淋しいものがあった。「人間乃木」としては、一生涯、大きな石に圧されているやうな心持で暮らして来た。

暗いものが煙のやうに乃木さんの一生を蔽ふてゐた。』

乃木は、嘉永2年(1849年)、江戸麻布日ヶ窪の長州藩上屋敷内で生まれた。この土地は、今は港区六本木6丁目で、地下鉄六本木駅から麻布十番に向かう道筋の一带だったはずだ。乃木が自決した場所は、乃木坂の外苑東通りに沿った場所なので、どちらも私が住んでいるところから遠くない。乃木家は定府(江戸定住)の典医だったが、父親の希次は武術に長けた人だったため、医ではなく武をもって仕えていたようだ。

子供のころの希典は弱虫で、友達からいじめられ、からかわれることが多かったらしい。武家の跡取り息子なので、父母は厳しく育てようとしたが、それと裏腹に、希典は武よりも文に惹かれる性格だったようだ。そのため、1864年16歳のとき、萩に住んでいた親戚の玉木文之進のもとに行き(家出したらしい)、農業を手伝いながら、文之進が開いていた松下村塾で学問を習った。文之進は吉田松陰の叔父に当る人で、松陰は文之進の高弟でもあった。

1865年藩校明倫館に入学したが、兵学寮ではなく文学寮に籍を置いた。このことにも乃木の文への志向が表れている。しかし、一刀流の剣術も学んでいた。1866年の徳川幕府による第2次長州征討に際しては、乃木も長州藩報国隊に

属して実戦に参加した。ところが、戊辰の役の前に、相撲で左足を挫いていたため、戊辰の役では何ら手柄を立てることはできず、このことが乃木に心理的な重荷になった。

明治新政府は、長州藩と薩摩藩の出身者が中心になって組織されたが、その中で意見が合わないことが出てきて、一旦は新政府の要職についた者が辞職して郷里に戻り、不平派を集めて反乱を起こすという事件が起こるようになった。その中で、明治9年(1876年)に起きた、長州の前原一誠らによる「萩の乱」では、乃木は新政府側の陸軍軍人として、前原則についていた玉木文之進や実弟の正誼と交戦するはめになる。その結果、文之進は自刃、正誼は戦死した。混乱した世の中で起きたことだとはいえ、これは乃木に負い目になった。

このような一種の内戦のなかで、一番大きかったのはもちろん西郷軍を相手にした西南戦争(明治10年、1877年)だ。この戦いで乃木は不運だった。当時、乃木は陸軍少佐で、小倉の歩兵第14連隊長だった。この連隊は熊本鎮台に属していたので、熊本城に入るべく小倉から駆け付ける途中、既に城外に達していた西郷軍に遭遇して、激戦となった。そのなかで、乃木は軍旗を失ったのだ。旗手だった少尉は行方不明になった。この失態は大問題になりかけたが、結局厳しい処置はなかった。しかし、これはあとあとまで乃木の重荷になり、「殉死」の際の書置きにも触れられている。西南戦争のその後の戦闘で何度も傷ついたが、それは責任を償おうとして、死を覚悟して戦ったためだ。

その後、乃木は35年ほど生きたが、その間、乃木は常に死に場所を得ようとしていたようだ。日露戦争でも、最前線を見回ることが多く、幕僚を困らせた。明治帝の崩御で、ようやく死に所を得たと感じたのだろう。その日の午前中は普段と変わらぬ態度で外出しており、その後写真師を自宅に招いて、写真を撮らせている。

自刃の様子については、詳しい検視報告が残されているが、武士の作法に則ったものだったようだ。現代の感覚で驚くのは、静子夫人も同

時に自刃したことだ。2児を失った夫人は、そういう気持ちになったのだろう。しかし、自刃ということは生半可な気持ちでできることではない。この夫妻の行為が多くの人々に強烈な衝撃を与えたのは当然だった。

乃木は詩魂を持った人だった。このことは、司馬遼太郎が「坂の上の雲」の中で詳しく書いている。中でも有名な漢詩「爾靈山」については、この詩を最初に見せられた志賀重昂（しが・しげたか。ジャーナリスト出身の文人で、第3軍司令部付観戦員として乃木の身近に居た）の感想を含めて述べている。この詩を読み下しの形で書いておこう。

にれいざん あによ かた  
爾靈山 険なれども 豈攀じ難からんや

男子功名 艱かんに克かつを期す

てっけつ  
鉄血山を覆うて 山形改まる

ひと にれいざん  
万人 齊しく仰ぐ 爾靈山

司馬遼太郎は、『「爾靈山」という、このことばのかがやきはどうかであろう。この言葉を選び出した乃木の詩才はもはや神韻を帯びているとあってよかった。二〇三(にれいざん)という標高をもって、爾(なんじ)の靈の山という、単に語呂をあわせているのではなく、この山で死んだ無数の靈—乃木自身の次男保典をふくめて—乃木は鎮魂の想いをこめてこの三字で呼びかけ、しかも結の句でふたたび爾ノ靈ノ山と呼ばわりつつ、詩の幕を閉じている。』と書いている。

明治は、文明開化に始まり、富国強兵の一等国を目指して、ひたすら突き進んだ時代だったが、その勢いは体制内で高い地位を占めた者ですら身の置きどころに困るほどのものだった。大いなる明治とはそういう時代だったのだと思う。（おわり）